
聖剣士物語

月夜魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖剣士物語

【Nコード】

N5793Z

【作者名】

月夜魅

【あらすじ】

彼らは、世界を守る者。聖剣士とも、三剣士とも呼ばれている正義の存在。鋼の騎士，岩窟の騎士，新緑の騎士。そして……。

この物語は、彼ら聖剣士の旅の記録。正義の生きざま、とくごとく
覧あれ！！

1..古の剣士(前書き)

世界は闇へ落ち始めている……。

我ら、古の騎士^{いにしえ}が目覚める時が来た。

1..古の剣士

セイライ

——聖頼 一〇一二年

ここは、中世の暮らしをするポケモン達が住む国。何もかもが同じではないけれど、よく似ている。そんなところです。

庶民、貴族、王族の階級があり、着ている衣類がそれぞれ異なります。庶民はボロ衣の服、貴族は華やかなドレスやまともな衣服。王族は更に華やかな、衣服に金や銀をちりばめたものを着ている。どの階級も、家は煉瓦や石造りが当たり前。

さて……本題に入りますか。

この世界には、【聖剣士の伝説】があります。地方によっては、【三剣士伝説】と呼ばれています。何千年も前から存在しているポケモンで、世界に危機が訪れる前触れが生じた時に、その姿を現すとされている。大昔にも、彼等は姿を現しています。

埃かぶった、分厚い茶色の本……。神々しい金の刺繍があるこれは、ポケモン達が語り継いでいる神話を集めた本。神集しんしゅうというもの。今私が手にしているのは、西の王が書いた神集です。

これの一部を読み上げ、物語を始めるとしましょう。

聞記^{あんぎ}三七年。世界は戦いの炎に飲まれていった……。世界の全てを我が物とするため、二人の王が各国を制圧していった。天下統一のために……。

最後に、自分達の国が残った。

二人の王はついに激突。戦場には、彼等を待ち構えていた三人の騎士が立ち塞がっている。

青く輝く剣で、彼等は両軍を攻撃。息をつく間もなく、圧倒的な力でねじ伏せた。

我に帰った二人の王は、過ちに気がつき三剣士に誤りました。

『もう二度と、こんな馬鹿な真似は起こさない！争いはしないと、王家で代々受け継ごう。』

青き鎧を纏う剣士は頷いた。名を覚えてくれと王が頼むと、青き騎士は言った。

『我々は、名を刻めるほどの地位にいない……。』

去っていく彼らを、我々はこう呼ぶことにした。『鋼の騎士』、『新緑の騎士』、『岩窟の騎士』。

世界はみんなのもの。他人の居場所を奪うことは許されない。この神話を聞いた時に、皆、目を閉じて思い出すといい。戦争の愚

かさと、虚しさを……。

——イメルラ国

中世の暮らしをする、ポケモン達が住む場所。ここの王はバンギラス。かつて、世界を我が物としようとした一族の末裔。今日も彼は、窓ごしに庶民の野次を聞く。

「労働条件をもっとよくしろ!!」

「女だって働けるわ! 女性ポケモンが働ける場所を作ってちょうだい!!!」

「金も食事も足りないんだ!!」

ボロ衣の服や石のアクセサリーを付けたポケモン達。庶民の野次は、傍らにいる執事のヤンヤンマが全てメモを取る。

「全て聞き受けました。」

「わかった。……庶民よ!! お前達の全て願いは聞き受けた!! 今すぐにはいかないが、検討しよう!!」

——その頃……

大人達が城に集まっている頃、庶民が住む町エルテナーでは……の、前に。エルテナーについてお話ししなくては。

エルテナーとは、この国の言葉で『影』という意味。石を積み重ね、セメントで固定しただけの四角い家で、エルテナーのポケモン達は暮らしている。

町に華やかさは無く、質素な雰囲気。店といえる店も、仕事だつてあまりない。そんな町だからこそ起きる、子どもが犯人の事件。

木の実を売る市場で、窃盗が起きた。窃盗を見たサイホーンは、ボロボロのローブを纏う小さなポケモンを追っていた。見えるのは、馬のような小さな脚四本のみ。青い蹄と白い脚……。このポケモンは一体？

「待てー!!」

「待てと言われて待つ奴いないよ！」

全速力で土を蹴り進む、ローブの子。路上の前を通り過ぎるこの子を、とあるポケモンが間近で見ていた。青き体の、紳士的なポケモンだ。路上を出て、皿になった目であの子を見つめていた。

「どうしたの？コバルト。まだ姿を現しちゃいけないんじゃないかなかった？」

「あ、嗚呼。今行く……。」

路上に戻り、上の空。緑のポケモンに、どうしたのさ？と聞かれるも、何も言わず。

「コバルト。」

「?! 嗚呼。すまない。」

「どうしたの？さっきから……。早くキオルと合流しよう。彼もも

う、眠りから覚めて神殿にいるはずだよ。」

疾風はやての如く去る、緑のポケモン。それを追うは、青きポケモン。彼等の跡を追い駆けてみましょう。

——シンラの遺跡

万物を司る者が舞い降りる。そう伝えられている神聖な場所。中は華やかな広間と祭壇のみ。

「遅い……。遅いぞ！！何やってんだあ？あの二人。」

広間の中を行ったり来たり。彼はテラキオン。茶色の大きな角を持つポケモン。ガッチリとしたたくましい体をしている。

眉間にシワを寄せてうろついている彼の元へ、あの二人がやってきた。

「やっぱりいた！ごめんキオル。遅れちゃって。」

「バジル、コバルト!! 五分も待たせるなんて酷いぜ?!」

「すまないと言っているだろ……。」

青きポケモンはコバルオン。長く立派な角を持ち、胸には白い毛。緑のポケモンはビリジオン。華奢で身軽そうな体をしている。

コバルトが正面のステンドグラスを見つめると、二人もつられて見つめる。

三枚の描かれているのは、神と呼ばれし二十四人のポケモン。左右に十二人ずつ。そして、真ん中のガラスには……。

「アルセウス様。」

バジルがつぶやく。神の名を。

世界創造の瞬間を描いたと言われている、このステンドグラスに向かって跪く三人。目を瞑り、天へ祈りを捧げた。

「……さて。」

早々と立ち上がるコバルト。二人の間を歩き、出入口へ。祈りを早く切り上げたコバルトに動揺し、バジルはあとを追う。それに続き、キオルも走る。

「ちょ！コバルト?!どこ行くのさー！」

「こらーッ！俺をおいてくなぁーッ!!」

神殿から二キロ離れた谷。下が見える高さで、黒い何かが谷底を進んでいるのが見えた。

上で見下ろすコバルト達。目をこらして、あれが何か模索する。

「戦車……? 無益な争いはしないと言いながら、まだあったのか?!」

顔をしかめ、キオルは黒いモノを目で追った。「どうする?」と、バジルはコバルトに……あれ?

「「……いない?!?!」」

「今日のコバルトおかしいんだよ!……あッ!!戦車追いかけてる
!?!」

「急ぐぞバジル!!このままじゃ見失っちまう!!」

――スクラップ置き場

町外れのスクラップ置き場。ゴミの山があちこちにある、腐敗した場所。まだ新品なのに捨てられたテーブルに布を貼り、小屋にしてあの子は住んでいた。盗んだ木の実を食べて、一人で生きている。

「ふう……。あの人は上手く巻いたし、今日はもう寝よう。」

ローブを着たまま、スヤスヤ寝息を立てて眠る。時間は漂う雲のような早さで、ゆっくりと流れる。音もなく、風も無い。そんなスクラップ置き場に、不穏な動きが……。

鬱^{うっしん}金色の土を踏みしめる、鉄の鎧を纏うポケモン達……。数は九

人。その中に、紫色の鎧を纏うポケモンが二人いた。このポケモンは、アーボックとハブネーク。

「……ハブ。こんな場所にあるのか？」

「殿下が直々におっしゃっていたのだから、間違いは無いかと。さあ、進みますよ？」

何かを探しさ迷う、謎の軍隊。真後ろのゴミの山の影には……コバルトの姿が。裏から出て、冷徹な眼差しで軍隊を見つめる。

「「コバルトー！！」」

「……バジル、キオル。」

「さっきからおかしいよ?! どうしたのさ。」

「ちょっと、な。」

コバルトの眼差しは、未だ遠くの軍隊に向けられている。二人の仲間の話を聞かず、ゆっくりと、鬱金色の土を踏みしめて歩く。

軍隊を追うために。

軍隊は、ゴミの山を見て歩いていた。ふと、アーボックが目を向けたゴミの山に、住処であろうテーブルが視界に入る。

「……？ ハブ、あれ見ろよ。」

「？」

ゆっくり近づく足音……。気がついてたのか、あの子は起きていた。

「おい！！」

軍隊に取り囲まれ、ローブの子は怯え始める。

「……青い蹄。あの一族の生き残りか。」

「あの一族？」

「このガキを連れていけ！！光の欠片についてわかるはずだ！」

「え？何？！離してー！！」

兵士によって引きずり出され、足を縄で固定される。そのまま宙吊りで運ばれてしまった。

何もない平地。そこには、黒い戦車が二台停まっている。

「その子は何も知らないよ。」

突然の声で、軍隊達は豆鉄砲をくらったように驚く。あそこだと、ハブネークは戦車の上を見つめる。

いたのは、鎧を纏う三人のポケモン。凛として立つその姿は、神話に描かれているポケモンに似ている。

青い鉄、ミスリルの兜と靴、膝当てを付けた青き騎士。同じ装備で、銅の騎士と緑の騎士がいる。緑の騎士は、軍隊にこう言う。

「もう一度言うよ。その子は何も知らない。君達が探している石は、僕ら聖剣士が持っている。」

「聖剣士?! ま……まさかッ!!」

「そう……。我らは神に選ばれし存在。悪を許さず、正義を貫く者
!!」

青き騎士は、瞑っていた目を開き、冷徹な眼差しを鬼のような睨みに変える。紫の鎧を纏う二人以外の兵士は、怖じけづいて動けなくなった。

「なっ、何を怯んでいる?! アイツらを……。」

「俺達が……何だ?」

いつの間にか、銅の騎士がハブネークの傍に。刃になっている、大きな角を喉仏に近づけていた。

「いつ……から……?!」

「何が目的だ？首を吹っ飛されたくなかったら……。」

ハブネークを守ろうと、横からサイホーンが突進。まともにくらった銅の騎士は、地を転がり回り岩に激突。彼がぶつかった衝撃で、岩は粉々に粉碎。

「いったあっ！」

「久々だから感が鈍ったみたいだね。岩窟の騎士、本当の突進ってやつ見せてやりなよ？」

「あいよ。」

無傷な銅の騎士に啞然とする軍隊。その最中、蒼騎士あおきしが縄を持つ兵士へ向かった。疾風の早さで背後へ回り、手加減して背に頭突き。

衝撃で手放されたあの子を、蒼騎士が背中で受け止める。

「き……貴様!!」

「……。」

悪役ではないのに、蒼騎士は兜の隙間から冷酷な瞳を見せる。彼の睨みに恐怖を覚えた兵士は、もはや弱者同然。怯えて震え上がっている。やがて後ろへ傾き、尻餅をついた。

瞳はそのまま、蒼騎士は辺りを見渡す。すると、周りの兵士も怖じけづいて、後退りする始末。

「デメェら、相手は蒼騎士じゃない俺様だ。……来なッ!!」

岩窟の騎士に言われ、蒼騎士から離れる兵士達。ローブの子へ目を向け、「大丈夫か?」と一言。蒼騎士の瞳は、冷静さを取り戻していた。

二人の騎士はバトルの真っ最中。岩窟の騎士は不特定多数の兵士を、二人のリーダーは緑の騎士が相手をした。騎士を睨むアーボッ

ク、息を飲んでからハブネークにこう言った。

「気をつけろ。あのデカイのが岩窟の騎士なら……コイツは新緑の騎士だ。」

「何?!」

笑みを浮かべ、新緑の騎士は陽気に振る舞う。

「ピンポン。あつたり。……なんて、呑気にしてられないか。君達の相手は僕で十分。蒼騎士がでるまでもない……よね?」

遠くの蒼騎士に問う。頷いて直ぐ、蒼騎士はローブの子を背中から下ろした。兜を少し上げて、口で縄を噛みきる。

一方、兵士達は岩窟の騎士に向かって猛突進。それを見た彼は、「やっぱこの程度だよなあ。」と、苦笑い。

「突進ってのはなあ……。こうやるんだよおツ!!」

無駄な動き無くスタートダッシュ。もの凄いスピードで兵士達へ突っ込んだ。彼の突進で、兵士達は宙を舞う。アーマーは碎け散り、無防備の状態に。幸い怪我は無かった。

強烈な突進力に負け、地面に叩きつけられた兵士達。全員目を回して気絶^{ダウン}している。岩窟の騎士は今、ブレーキをかけるのに必死そう
だ。

——ザザアアアー……

「……ふう。どんなもんだいッ!!」

「遠くで威張ってるし。……さて、やりますか。どこからでも掛かって来なよ。」

「みくびるなよ?!」

ハブネークとアークボックは、毒の牙を繰り出す。新緑の騎士は余裕綽々。迫り来る二人から逃げようとはしなかった。

後ろ脚で地面を蹴り、反動を利用してばく転。ギリギリ当たらない距離で舞かわした。

——うそ……だろ?!

——こんな近距離でかわした?!

その場に着地し、新緑の騎士は額に太陽の光を集める。

「まずい!次が来るぞ?!!」

「今頃構えたって遅いよ……?正義の鉄槌^{てつづい}、受けるがいいッ!!」

振り返って、ソーラービームを放つ。ハブネークだけ、間一髪で避けることができた。避けるのに必死だったため、こけて頬を擦りむく。

「ボラン!!」

「仲間を気にしてる場合？」

起き上がったハブネークの背後には、新緑の騎士。青白く輝く角を叩きつけ、切傷を負わせた。鎧のおかげで、傷は浅い。

「こ……これが、古の力……か……。」

ハブネークダウン。辺りを見渡してから、新緑の騎士は一息つく。全員、蒼騎士の元へ歩いた。

「終わったよ。コバルト。久しぶりのバトルだったから、腕が落ちたかな？ 僕ら。」

「だな。……で、コバルト。言われた通りにやった方がいいがよ。このガキがどおした？」

前脚で起用に兜を上げ、素顔をさらけ出す。なんと三剣士は、あ

の三人。コバルト、キオル、バジルだった。彼らを見たローブの子は、驚いている様子。

「……名は？」

「え？ボク……。」

「いいから。それとも、私から言うか？もうバラしたに等しいしな。この二人が……。」

冷めた目で、バジルとキオルを睨む。コバルトの睨みに耐えられるのは、この世界に二人しかない。

「仕方ないじゃないか。ね？キオル。」

「気が抜けたって言うか……なんてーか。」

「お前らしばくぞ？……まあ、今回は仕方ないか。少年。私は鋼の騎士コバルト。またの名を蒼騎士。銅の彼はキオル。岩窟の騎士。緑はバジル。新緑の騎士だ。……君は、水の騎士の末裔だね？」

コバルトの言葉に疑問を抱き、二人の騎士はローブの下にある脚を見る。気がついたのか、二人は顔を見合わせた。

「水の……？ボク、自分のことわからないんだ。親はいないし。あと、このローブ……。」

絶対に脱ぐなって、育ててくれたおじいちゃんが言ってた。」

ローブの子の話が終わると、コバルトはローブごと項をくわえた。戸惑うこの子を見捨て、コバルトは歩く。バジルとキオルは、また慌てて追いかける。

「あの……コバルトさん？ボク……。」

「さんは余計だ。呼び捨てで構わない。」

「ちょっとコバルト、その子どうするの？」

バジルが問いかけるも、コバルトはまた無視。

ローブの子の家があるスクラップ山に着き、コバルトは彼を優しく

下ろす。ローブの子は、家の中へ入り座った。コバルトもその場に座り、少し話をしていいかとバジル達に言う。

「いいけど……。」

「おう……。」

「ありがとう。……。少年、名前は？」

「リオ。」

「リオ……。家にある、その箱は？ ネックの飾りになっている、それ。」

木の実を入れるビンにかけている、古びたネック。コバルトが指摘するそれを取り、リオはコバルトに手渡した。前脚で小さな箱を開けると、レモン色に輝く小さな欠片が出てきた。この欠片を見て、コバルトの予感確信に変わる。

バジル達に、考えていたことを全て伝えた。

「あの時代で、我々が悪用されぬよう砕いたあれだ。我々も持っているから、わかるだろう？ 他にも騎士がいたことは覚えているか？ 路上からこの子を見ていた時、似た波動を感じたのだ。だから、あんな行動をした。もし末裔なら、我々が守らねばならないと思っ
ね。」

箱のフタを閉めると、リオの首にかけた。そして唐突に、「共に来ないか？」と言う。ビックリしたのはリオだけじゃない。キオルもだった。

地団駄を踏んで、コバルトを引きとめようと試みるも、彼の心へは届かない。

「待て待て待て！！このガキ連れてくのかあ？！俺達の旅は危険なんだぞ！！」

「まだ子どもだ。光の欠片を持っているのだから、いずれ奴らに狙われる。何故欠片を狙うのか……それが気がかりだな。ともかく、リオを守る大人が必要だ。……すまないな。勝手に話しを進めてしまつて。決めるのは君だ。明日の夜まで待とう。その間、君に何かあったら我々が守る。いいね？」

「はい……。あの、光の欠片って？」

「また明日話そう。今日は、頭の中を整理するといい。一度に色んなことが起きたから、混乱しているだろう？ 私も考える事があるから……。」

――夜

コバルトは、スクラップ山の頂上で満月を見ていた。雲一つない星空は、光に満ちていて綺麗だ。リオは、家の中でコバルトを見つめている。

残りの二人は、遠くのスクラップ山にもたれて寝ていた。キオルのやかましいイビキを気にせず、バジルは眠る。

――あの軍隊……。あの鎧……。……欠片を狙う理由は、恐らく……。

考え中のコバルト。月を睨んで様々な仮説を立てている。
一方リオは、育ててくれたおじいちゃんの話しを思い出していた。
死ぬ前に言っていた、大切な言葉を。

——回想

『リオ……。これから先は、古の三劍士^{いにしえ}を待ち続けなさい。彼らと共に生きなさい。このネックは、絶対になくすんじゃないよ?』

『うん。』

『そのローブは、時が来るまでお前から離れないだろう。その時までの辛抱じゃ……。……わかったね? リオ……。』

「……おじいちゃん。ボク、おじいちゃんを信じてみる。行くね?」

家から出て、リオはコバルトの名を叫んだ。響き渡る叫びを聞き、バジルとキオルが起きる。

「どうした? リオ。」

「コバルト、ボク……。一緒に行くよ。ボクの役目、見つけたいんだ。ボクが何者なのか……。ちゃんと確かめたい。」

「わかった。では明日、旅の目的と理由を話そう。今日はもう寝なさい。私は大丈夫だから……。」

「うん。おやすみ。コバルト。」

‘ T o b e n e x t ‘

1..古の剣士(後書き)

【次回予告】

リオ

「光の欠片って何？」

旅をするのは何故？

何と戦うの？

ボクは……何者なんだろう……。。

次回もお楽しみに！」

聖剣士とリオ

「剣よ、闇を切り裂け！！！」

2.:コバルトの仮説(前書き)

僕らは聖剣士。

正義のためならば、命だって投げ捨てられる。

2..コバルトの仮説

――朝

聖剣士とリオは、イメルラの城下町にいた。リオの服装は庶民。もちろん、回りから出ていけという目付きで見られた。

コバルト、バジル、キオルは貴族服。が……みんな別々の国の服を着ている。

まずコバルト。彼はこの地方の服装だ。

脚には金のアンクレット。エックス型のもので、ダイヤモンドがちりばめられている。黒いシルクハットには、赤い帯。美しく輝く羽のブローチが付いている。

次にバジル。和装という、アジア地方独特の服装らしい。

前脚に桜舞う布のアンクレット。首には白いファーを巻いている。成人式の日、女性が首に巻くあれだ。桜のブローチでファーをとめている。

最後にキオル。ラグレム地方の服装らしい。

頭にウエスタンハット。……それだけ。

「まさか神殿に、我々の私物が封印されていたとは。あの人の気遣いに救われたな。」

「うん。……キオル。いつも思うんだけどさ、もっとマシな服装は考えつかなかったの？」

「俺様はこれが限界なんだよ!! ガタイ見てみろ? なぁんも着れねえさ。」

「そ、そう……。ねえ、リオに何か買ってあげようよ。庶民らしさをちょっとでも無くさなきゃ、この時代でも厳しいみたいだし……。ローチェ地方の服装なんてどう? 水の都と言われてる国だよ。」

しゃしゃり出るバジル。口をぽかんと開けて、コバルトはちょっと驚きぎみ。

「相変わらず情報が早いなあバジル。あー、コバルト?」

「ん?」

「あのスクラップ置き場で見つけた通貨、あるか?」

「たった三八カランで何を買うんだ？」

目を細め、キオルに言う。この世界の通貨は様々。P^{ポケ}を共通通貨としていくけれど、普段は国が持つ個人通貨を利用している。イメルラ地方は、カランという平らな白石を使用。

「リオにはネックレスがある。イメルラの銀と銅でできているから、大丈夫だ。またいずれ、ちゃんとした物をあげよう。そのローブが取れたらな。」

コバルトが放つ、精一杯の微笑みはリオに。嬉しくなり、リオは無邪気にコバルトの回りを駆けて回った。

「わぁーい！服だ服だー♪」

「リオ、ここは城下町だからはいじゃいけない。控えるんだ。」

「はいー！」

歩き出し、コバルト達はこの城下を出ることに。小さな足で一生懸命ついで行くリオ……。バジルはリオの歩幅に合わせてやり、二人で会話を始める。

その前で、コバルトとキオルが小声で会話。綺麗な町に合わない内容である。

「コバルト、あの軍隊……。」

「ああ。光の欠片は、この世界の力。聖なる宝玉……。それを狙う理由はたぶん……。」

「世界征服。だな。」

「おそろくな。私達は、これを阻止するために目覚めたのだろう。欠片を軍隊より先に集め……封印する。という道理だな。」

「なるほど……。バジルとリオにも話さなきゃな。ここを出たら、人気の無い場所で。」

「うむ。」

——エルサの森

町で暮らさず、ありのままの生き方をするポケモン達が住んでいる森。ありのままということは……言わずともわかりますね？
コバルト達は、ホタチ池と呼ばれている場所に来ている。ミジユマルの持つ貝ホタチ形の池だ。

「さて、何から話そうか……。」「

「コバルト達のこと教えて。三剣士とか聖剣士とか騎士とか……。色んな呼び名があって混乱しちゃったよ。」

子犬座りをして、リオは頭をくるくる回した。みゅーんって、可愛らしい効果音まで言いながら。

笑うコバルトを見て、バジルとキオルはビックリしている。

本来彼は、あまり感情を表に出さない人柄。冷静沈着で、表情なんて滅多に変えない。故にぶきつちよ。

「わかった。……我々は聖剣士。悪を許さず、正義を貫く者。三剣士というのは、もう一つの呼び名だ。私達は、個々に通り名を持っている。例えば……私なら鋼の騎士。この三人の中では、蒼騎士と言っている。」

「騎士は、個人の名前ってことだね。ボクは新緑の騎士。キオルは岩窟の騎士。三人合わせて、聖剣士。またの名を三剣士。それだけさ。……それよりコバルト。」

「ん?」

「あの連中、光の欠片を狙ってたよね? ひょっとして……。」

ホタチ池は、たちまち緊張感走る空間に。コバルトは、真剣な眼差しで三人を見渡す。少し考え、話し始める。

「……。今から、私が立てた仮説を話す。これが終わったら、ミュシェーニの町へ行こうと思う。いいな?」

「うん。」

「了解だ。」

バジルとキオルが返事。リオは頷いただけ。

「光の欠片は、聖なる宝玉を砕いたもの。悪用されるのを防ぐため、我々が先読みして砕いたのだ。リオは一つ、我々は三つづつ所有している。」

この欠片には、我々ポケモンの力を増幅する効果がある。宝玉となればどうなるか、わかるな？」

「なんか大変そうだね……。」

「大変どころじゃないぞ、リオ。奴ら……あの軍隊はこれを探していた。とすれば、だ。奴らは何かしら企んでいるに違いない。リオをあんな目に合わせたんだ。悪の可能性はなきにしもあらず。情報を集めて、最終的に判断するがな……。」

言いたいことを話し終え、一度一息つく。

「何が言いたいかはわかったな？これより！！我ら聖剣士は、軍隊より先に欠片を集める旅を始める。永い旅になるが、世界のためだ。みんな、頑張ろう！」

コバルトが左足を差し出すと、バジル、キオルも同じようにする。互いの足を重ね合わせて、円陣を組んだ。きよんとするリオへ目を向け、聖剣士は無言で誘う。状況がわかっていないリオは、正面にいるバジルを見つめていた。

「円陣に入っているんだよ。まずは見習いからだけど、君も同じ剣士なんだからね。足、届かなくて大丈夫だから。」

「えっと……。はい！」

元氣よく返事をし、円陣に加わったりオ。天高く前足を上げた。

「よし……。正義のため、行くぞッ!!」

「「オォーッ!!」」

——上空

遙か上空で、聖剣士を見張るリザードン。赤い鎧を纏っていた。腕時計型のトランシーバーで、何者かと連絡し合っている。

「聖剣士の復活を確認。例の子どもも一緒です。毒部隊の報告通り……。あの一族の末裔ではないかと。」

——ザザッ……

「一度、ミュシェーニへ戻れ。聖剣士のことだ……。組織の計画は薄々気づいているはず。邪魔をするようであれば、即刻排除するのだ!!」

「承知しました。」

通信を切り、リザードンは東へと飛んだ。どうやら、コバルトの予想は黒だったようだ……。

——豊穰の町

ミュシェーニ

イメルラの食料庫と言われている町、ミュシェーニ。季節に合わせた木の実や薬草を育て、全国へ向けて貿易船を走らせている。今は冬。皮が固い木の実を多く栽培している。

「ミュシェーニに着いたことだし、食料確保しない？ お腹空いちやった。」

「そういえば、私も……。」

「ボクもー。」

——ぐう——……

とても大きなお腹の音を聞き、リオがビクリしてピョンと跳ねた。バジルは笑いを堪え、コバルトは犯人を冷めた目で見る。

「……キオル。腹で返事をするな。」

「へへっ！わりいわりい。」

鮮やかな茶色の煉瓦家。農業が盛んな場所なので、さほど貧富の差はなく見える。町には、ツリーに飾るような光のイルミネーション。冬を統べる龍、キュレムと思われる飾りもあった。

パン屋によって、持ち金で買えるだけパンを買う。それが終わると、近くの公園へ向かった。

公園の芝生の上に座り、四人は食事をすることに。前足で紙袋を開けて、バジルは三人にパンを配る。

「はい、リオはくるみパンね。」

「ありがとう！バジル。……わぁー。こんなの食べたことないよ！」

くるみ入りの丸いパンに興味津々。キオルはさっそくドカ食いついていた。

「キオル……。はしたないぞ。」

「ン？%#☆¥ゝ？」

「……。神経質だと言いたいんだな。」

「ふぉーら（そうだ）。」

コバルトも包みを開け、パンを食べ始める。急がないといけないというのに、上品な食べ方。型にしっかりとハマっているコバルトだから、型破りなキオルとはちよつと合わないんだ。と、バジルがリオに教える。

「こんなにバラバラな性格だけど、仲良しなんだよ？僕達。たまーに二人が喧嘩するくらいでさ。」

「バジルは？」

「僕？僕はあまり争いは好まないから。正義のための戦いは、別だけれどね。早く食べちゃお。軍隊について情報を集めなきゃ！」

と、言いつつ。バジルは二人に注意。彼のおしとやかな怒鳴り付けは、不思議なことに、有権者であろう二人をビビらせた。

「キオル、喉詰まりしたって知らないからね？！コバルトも、急がないといけないんだよ？！」

「「……はい。」」

「まったくもう。」

こうして、公園に静かな時間が流れ始める。くるみパンを食べながら、リオは聖剣士を見渡した。
リーダーはコバルト。キオルは重戦車。バジルは……？リオが出し

た結論は、影のリーダー。

——あの一言でみんな普通になっちゃったんだもん。バジルもリーダーなんだ。きっと。

「七百年ぶりに怒鳴られたな。」

「あれ以来聞いてねえからなあ。国同士の戦争を止めに行った……あれ。」

「ふふふ。あまり怒らない人から言われると、案外怖いものだよ?」

前言撤回。リオは、ただ怖かったただけなんだと悟った。ローブの中、目を点にして聖剣士を見ていた。

——五分後

聞き込み開始。リオはコバルトと行動している。人から人へ、店の中まで聞き込みをし……。得た情報は無し。歩き疲れたリオを背中に乗せ、コバルトはミュシェーニの町を歩く。

エルテナーとは違う、質素でも豊かな風景。みんなが笑顔で暮らしている、幸せな場所。けして裕福ではないけれど、華やかな暮らしではないけれど、みんな明るく生きている。エルテナーには無い、小さな幸福。

「……。」

「リオ。」

「え?!……何?」

「羨ましいか?ここのポケモン達が。」

「……うん。」

「ミュシェーニは、イメルラの城下から離れている。国の中心から遠いと、こういった独自の発展ができるんだ。イメルラとは違って、貧富の差はさほど無い。しかし、けして裕福な暮らしではない。見

てわかるね？」

明るい風景の片隅には、路地裏で生活する子ども達がちらほら。やはり、影はこの町にもあるのだ。パン一つで、子ども達が喜んでいる。そんな生活を影で……。

「あの子達には、親はいない。捨てられたか、早くに他界したか……。ああして力を合わせて暮らしているんだ。……リオ、私は七百年以上も生きてきた。貧富の差はどの時代にもあるが……これは無かった。民の意を聞き流していると思えない。……ああ、すまない。つい難しい話を。」

「平気だよ。コバルトって、色んなこと考えてるんだね。ポケモン達のこと、ちゃんと見てるもん。コバルトが王様だったらいいのになあ。」

無邪気な言葉。コバルトの顔は曇り、「そうか」と力なく言った。リオはきよんとしている。

——……。わかっています。アルセウス様。人には、生まれ持つ運

命がある。我々はただ、正義へ進むのみ。

——said バジル

聞き込みに夢中で、中心部から離れてしまったバジル。ただいま、中心部まで戻っているところ。

「真剣になると回りが見えなくなるんだった。僕。それなりに収穫は得たし、コバルト達を探そう。」

——?!

十字路の中心にきて、辺りを警戒。なんのへんてつもない路地裏に、違和感を覚えたのだ。壁が高く、豆電球程度の光しか届かない暗がり、バジルは一人身構える。

——ポケモンの気配がする……。だけど、どこにもいない。障害物

なんて見当たらなし。

この波動……闇に染まっている。あの軍隊か?!……どこだ?どこにいる?!

どこかわからない場所。バジルの頭に手をかざすポケモンの影がある。三色の指を点滅させ、バジルを攻撃した。

——ドクンツ

「ううッ!!……ぐ……」

崩れ落ちるバジル。彼が倒れたのを察知したかのように、風景が変わった。腐敗した、殺伐とした路地裏に変わっている。ゴミの山が、壁の所々に寄りかかっていた。

襲い来る激しい頭痛と、締め上げられる首……。二つの苦痛に耐えるが、徐々に意識が遠のいていく。

そんな彼の元に、二人のポケモンが姿を現した。

「聖剣士、確保。」

「あはは。アークの幻影は、見破れなかったみたいだねえ。」

白い鎧を纏ったポケモン、ゾロアーク。背には大きな斧。全ては、彼が見せていたマヤカシだったのだ。緑の鎧を纏ったポケモン、オーベム。バジルを攻撃したのは彼女。

「……知りすぎたよ。アンタ。」

「そうそう。死なれたら困るから、手加減して首を締め上げといたよ。新緑の騎士……バジル・フォレストスさん。」

かすむ瞳で、バジルは力一杯睨みつける。ほぼ無抵抗な彼を嘲笑うオーベム。少し狂っていた。

「なあに？ そんな状況でやり合おうっていうの？ バツかじゃない？！」

「聖剣士を……舐める………なよ………ッ!!」

額に光を集め、ソーラービームを放とうと試みる。オーベムは一人、冷めた目付きでバジルを見つめ、再び手をかざす。指が点滅すると、バジルは苦しみもがきだした。

「ああアアアアッ!!!!」

「……死にたいの？君。大人しくしてよ。君が得た情報全て………消さなきゃいけないんだから。ウチら、【闇纏う騎士団】の情報をさ………。」

——said コバルト

「コバルトー!」

の太い声が、コバルトの動きを止める。振り返った先には、ブレイキを掛けて進むキオル。町中のポケモン達が道を開けて、彼を見つめていた。

「あの馬鹿……。」

危ないと予知して、コバルトは五歩前へ出る。

——キイイイ……

「っだあ止まった。」

「止まれなくなるなら走るな。……情報は？」

「バツチリさ！！バジルは？」

首を振り、背に乘せたりオをチラ見。

「ありゃ？歩き疲れたか。」

「うん。こんなに長く歩いたこと無かったから。」

「キオル、公園へ戻ろう。バジルがいるかもしれない。」

「ガッテン承……。」

――?!――!

コバルト、キオル。揃って辺りを見渡し警戒。互いの背中を預けて、三六〇度監視する。

二人の前から武装兵士が走り来る。紋章が刻まれた盾を見つめ、二人の聖剣士は警戒を解いた。リオはというと、コバルトの背で怯えていた。

「……囲まれちゃったな。」

「構わん。手荒な真似はするなよ? イメルラの宮兵だ。」

「……ずいぶんと詳しいな。密告者、我々とイメルラ城下へ来てもらおうか。どうやって来たかは知らないが、民を誘拐した罪は重いぞ?」

コバルトとキオルは、顔を見合わせた後で高笑いした。二人の行動を見た宮兵はざわめく。

「なっ……何がおかしい?!」

「お前らよお、誰が密告者だって?俺様達がわからないか?」

「「……?」」

「どうやら、わからないようだな。……この子を頼む。」

「あいよ。」

少しかがみ、コバルトはリオをキオルに預ける。項をくわえられ、リオは宙ぶらりん。

「……さて、この愚行をどう償ってもらおうか。」

闇を纏った、コバルトの冷酷な睨み。鍛え抜かれた宮兵さえもかなわない、身も凍る恐怖。何があったかわからない背後の宮兵は、怯むなと怒鳴る。

「だ……駄目だ。かなわない。」

「コイツ、強すぎるんじゃないか……?！」

「よしやれッ!！」

コバルトの合図で、キオルは小走りで突進。体を横に向けてスライディングタックル。宮兵は、石ころのように町中を転がり回った。

「手加減したんだから、大目に見てくれよな?俺達には急用があるんで。」

背後の宮兵に言い、先に走り去ったコバルトを追いかける。
公園へ着くと、コバルトしかいなかった。リオを降ろし、辺りを見
渡す。

「あれえ?! バジルはまだか?!」

顔をしかめ、コバルトはまた走り去る。リオはまた宙ぶらりん
なり、キオルと共にコバルトを追う。

「なしたあ?!」

「宮兵だ。」

「はあ？」

「バジルは宮兵に捕まったのかもしれない。ちゃんと誤解を解かね
ば、先へは進めない! リオは任せる!! 私が直々に先陣を切ろう!
!」

胸騒ぎがするのか、コバルトは少し焦っている。自分がしたこと
は、正義に反するモノだ。軍隊について知るのも大事だが、誤解を
解かねばバジルは助からない。
ギリギリと、歯を噛み締めるコバルト。感情を押さえつけて冷静に
振る舞う。

「イメルラ城下町へ行こう。愚行をしたのは我々の方だ。」

「だな。ちったあ焦り過ぎたよな、俺達。」

「……バジル、大丈夫かな。」

——s a i d バジル

オーベムに記憶を消されたバジルは、イメルラ城の地下牢で眠っ
ている。気絶した彼を、オーベム達が城へ突き出したのだ。イメル
ラの住民に化けて。

「ふふ。アークの幻影凄いな。」

「できて当たり前だ。」

「……さあて。聖剣士は残り二人。そして、末裔が一人。あははは！ 獲物を横取りするって、楽しいなあ♪……でも。これ以上、手を出しちゃいけない。持ち場に戻ろう。」

オーベムの念力で、二人の兵士は上空から城を眺めていた。空を飛び、彼らはミュシェーニをあとにする。果たして、聖剣士の運命は……。

「T o b e n e x t」

2..コバルトの仮説(後書き)

【次回予告】

リオ

「バジル、大丈夫かな？」

……コバルト、その目怖い。

ついに、敵の正体が……戦う相手がわかるんだね！

次回もお楽しみに！」

聖剣士とリオ

「剣よ、闇を切り裂け！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5793z/>

聖剣士物語

2011年12月27日01時47分発行